

大学における韓国語教育の現況と問題点

中島 仁

はじめに

本稿では日本の大学における第二外国語としての韓国語教育の現況を述べる。専攻課程については扱わないこととする。それにあたりまず、日本の大学における韓国語教育の簡単な流れを整理し、その後、現在の教育状況・特徴・問題点・CEFRの指標導入等について述べる。さらに、例として筆者の所属する東海大学の韓国語カリキュラムを例に上げつつカリキュラム作成上問題となりうる点について論じる。

韓国語教育の流れ

大学での韓国語教育が拡大し始めたのは1980年代になってからであり、他の言語に比べると遅いと言える。大村益夫（1984）によれば非専攻課程で韓国語が学べる大学は当時43校で、1990年代以後に韓国語教育を実施する大学は急激に増加した。

NHKでも韓国語講座が1984年から「ハングル講座—アンニョンハシムニカ」という名称でテレビとラジオで始められるなど国内における韓国語教育の転換点とも呼べる時期であった。なお、2002年1月には大学入試センター試験の外国語科目として韓国語が正式に導入された。

韓国語教育の実施状況について、国際文化フォーラム（2005:29,33）の調査結果を整理したものが次の表1である。

【表1】4年制大学での韓国語教育実施状況

年度	開設校（校）	実施率（%）
1988	68	—
1993	90	—
1995	143	25.3
1998	215	—
2000	263	40.5
2001	285	42.6
2002	322	46.9
2003	335	47.7

この調査以降、大規模な調査が行われておらず2021年現在はさらに拡大していることが予想される。

大学における韓国語教育の特徴

大学で教育されている韓国語科目の学習レベルは国際文化フォーラム（2005:53）によれば、入門から中級までがおよそ85%を占める。級の区別基準が明記されていないため詳細はわからないが、あまり高いレベルの授業までは行われず科目数も多くないことが予想される。조선어교육학회 한국어교육현황조사분과회（2020:15）で示されている教養科目としての韓国語の履修者数が3年次から激減していることからそれが裏付けられるだろう。つまり、1年次に初級、2年時に中級の授業が行われ、それ以降の科目が少ないのである。

また、多くの学生が小学校や中学校から学んできた英語と異なり、独学してきたり高校で学習したりした学生を除くほとんどの学生が全くの初習である。韓国語の表記にはハングルが用いられており、また発音も日本語母語話者にはあまりなじみがない閉音節が多いこと（英語の閉音節とも異なる）から、単語や文法などを覚える前段階として文字と発音を覚えるのに時間がかかるという特徴がある。多くの場合、週2回の授業で1カ月ほど、週1回の授業では2カ月ほど、実に1学期の授業の3分の1から半分ほどの時間が文字と発音を覚えるために費やされてしまうことになる。

学習動機に関しては21世紀に入ってからとそれ以前では大きく異なり、最近の履修者の傾向として「K-POP・韓流（スター）に関心がある」、「食べ物や化粧品・ファッションに関心がある」、「韓国へ旅行に行った時に役に立ちそう」、「習いやすいと聞いたので、周りから勧められて」等が多くを占める。韓国語という言葉自体にそれほど強い関心がなく、いざ学び始めてみると文字や発音が難しいということもあり、何となくやってみようということではじめてはみるが長く続かない学生が多い¹。

このような理由もあり、CEFRの指標導入をすることは可能であっても、大学の第二外国語としての韓国語教育に実用・運営するのが難しい状況にあると分析できる。

CEFRの指標と資格試験

上で述べたような理由から、少なくとも大学の第二外国語としての韓国語教育においてCEFRの指標が導入されている事例はないと思われる。その代わりに学習者の到達指標としてしばしば言及されるのが韓国語の資格試験の基準である。現在、日本で主に受けられている資格試験には（1）「ハングル」能力検定試験と（2）韓国語能力試験の2つがある。「ハングル」能力検定試験は日本初の韓国語資格試験であり、1993年の第1回が実施された。現在まで54回実施され、延べ出願者数は45万人を超えている。各級のレベルは表2の通りである²。

【表2】「ハングル」能力検定試験の各級のレベル（1級が最上級）

級	
5級	<p>60分授業を40回受講した程度。韓国・朝鮮語を習い始めた初歩の段階で、基礎的な韓国・朝鮮語がある程度理解し、それらを用いて表現できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ハングルの母音（字）と子音（字）を正確に区別できる。 ・約480語の単語や限られた文型からなる文を理解することができる。 ・決まり文句としてのあいさつやあいづち、簡単な質問ができ、またそのような質問に答えることができる。 ・自分自身や家族の名前、特徴・好き嫌いなどの私的な話題、日課や予定、食べ物などの身近なことについて伝え合うことができる。

1 学習動機に関しては朴珍希（2016）や授業内に行うアンケート資料（非公式）等による。東海大学の例で言えば、文字や発音から学ぶ「韓国語入門1」を履修して、その次段階である「韓国語入門2」に進む履修者はその半数にも満たない。なお、履修は完全任意である。

2 ハングル能力検定協会 <https://hangul.or.jp/>

4 級	<p>60分授業を80回受講した程度。基礎的な韓国・朝鮮語を理解し、それらを用いて表現できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・比較的使用頻度の高い約1,070語の単語や文型からなる文を理解することができる。 ・決まり文句を用いて様々な場面であいさつやあいづち、質問ができ、事実を伝え合うことができる。また、レストランでの注文や簡単な買い物をする際の依頼や簡単な誘いなどを行うことができる。 ・簡単な日記や手紙、メールなどの短い文を読み、何について述べられたものなのかをつかむことができる。 ・自分で辞書を引き、頻繁に用いられる単語の組み合わせ（連語）についても一定の知識を持ちあわせている。
3 級	<p>60分授業を160回受講した程度。日常的な場面で使われる基本的な韓国・朝鮮語を理解し、それらを用いて表現できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・決まり文句以外の表現を用いてあいさつなどができ、丁寧な依頼や誘いはもちろん、指示・命令、依頼や誘いの受諾や拒否、許可の授受など様々な意図を大まかに表現することができる。 ・私的で身近な話題ばかりではなく、親しみのある社会的出来事についても話題にできる。 ・日記や手紙など比較的最長い文やまとまりを持った文章を読んだり聞いたりして、その大意をつかむことができる。 ・単語の範囲にとどまらず、連語など組合せとして用いられる表現や、使用頻度の高い慣用句や慣用表現なども理解し、使用することができる。
準2 級	<p>60分授業を240～300回受講した程度。日常的な場面で使われる韓国・朝鮮語に加え、より幅広い場面で使われる韓国・朝鮮語をある程度理解し、それらを用いて表現できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・様々な相手や状況に応じて表現を選択し、適切にコミュニケーションを図ることができる。 ・内容が比較的平易なものであれば、ニュースや新聞記事も含め、長い文やまとまりを持った文章を大体理解でき、また日常生活で多く接する簡単な広告などについてもその情報を把握することができる。 ・頻繁に用いられる単語や文型については基本的にマスターしており、数多くの慣用句に加えて、比較的容易なことわざや四字熟語などについても理解し、使用することができる。
2 級	<p>幅広い場面で使われる韓国・朝鮮語を理解し、それらを用いて表現できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手に対して失礼のないように表現を選び、適切にコミュニケーションを図ることができる。また、用件的に複雑な依頼や謝罪、批判などに関しても、適切に表現を選択し目的を果たすことができる。 ・単語や言い回し、イントネーションなどの選択に現れる話し手の感情（ニュアンス）もほぼ理解することができる。 ・公式な場面と非公式な場面の区別に即して適切な表現の選択が可能である。 ・幅広い話題について書かれた新聞や雑誌の記事・解説、平易な評論などを読んで内容を理解することができる。また、取り扱い説明書や契約書、請求書や見積書、広告やパンフレットなど実用的な文を読んで、その意味を具体的に把握することができる。 ・連語、慣用句、慣用表現はもちろん、ことわざや頻度の高い四字熟語についても理解し、使用できる。 ・南北の言葉の違いなども多少理解することができる。
1 級	<p>幅広い場面で用いられる韓国・朝鮮語を十分に理解し、それらを自由自在に用いて表現できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手のみならず、場面や状況までを考慮した上で、的確に意図の実現ができ、報告書やエッセイなど、ほとんどのジャンルを考慮したスタイルの選択も可能である。 ・職業上の業務遂行に関連する話題などについても取り扱うことができる。 ・幅広い話題について書かれた新聞の論説・評論などの論理的にやや複雑な文章や抽象度の高い文章、様々な話題の内容に深みのある文章などを読んで、文章の内容や構成などを理解できる。 ・要約や推論、論証や議論など、情報处理的にも高度なレベルが要求される処理を、韓国・朝鮮語を用いて行うことができる。 ・類推の力を働かせて、知らない単語の意味を大体把握できる上、南北の言葉の違いや頻度の高い方言なども理解することができる。連語や四字熟語、ことわざについても豊富な知識と運用力を持ち合わせており、豊かな表現が可能である。

続いて、韓国語能力試験は韓国の教育部（日本の文部省に相当）の国立国際教育院が認定・実施する試験である。略称はTOPIK（Test of Proficiency in Korea）であり、級別の認定基準（全般）は以下の表3の通りである³。

3 <https://www.kref.or.jp/examination/topik>

【表3】 TOPIK の級別認定基準（6級が最上級）

評価等級		評価基準
TOPIK I (初級)	1級	<ul style="list-style-type: none"> 自己紹介、買い物、飲食店での注文など生活に必要な基礎的な言語（ハングル）を駆使でき、身近な話題の内容を理解、表現できる。 約 800 語程度の基礎的な語彙と基本文法を理解でき、簡単な文章を作れる。 簡単な生活文や実用文を理解し、構成できる。
	2級	<ul style="list-style-type: none"> 電話やお願い程度の日常生活に必要な言語（ハングル）や、郵便局、銀行などの公共機関での会話ができる。 約 1,500 ～ 2,000 語程度の語彙を用いた文章を理解でき、使用できる。 公式的な状況か非公式的な状況かの言語（ハングル）を区分し、使用できる。
TOPIK II (中級・上級)	3級	日常生活を問題なく過ごせ、様々な公共施設の利用や社会的関係を維持するための言語（ハングル）使用が可能。文章語と口語の基本的な特性を区分し理解、使用が可能。
	4級	<ul style="list-style-type: none"> 公共施設の利用や社会的関係の維持に必要な言語（ハングル）機能を遂行することができ、一般的な業務に必要な機能を実行できる。 ニュースや新聞をある程度理解でき、一般業務に必要な言語（ハングル）が使用可能。 よく使われる慣用句や代表的な韓国文化に対する理解をもとに社会・文化的な内容の文章を理解でき、使用できる。
	5級	<ul style="list-style-type: none"> 専門分野における研究や業務に必要な言語（ハングル）をある程度理解と使用ができ、政治・経済・社会・文化などの全般に渡った身近なテーマについて理解し、使用できる。 公式的、非公式的且つ口語、文語的な脈絡に関する言語（ハングル）を適切に区分し、使用できる。
	6級	<ul style="list-style-type: none"> 専門分野における研究や業務遂行に必要な言語（ハングル）機能を比較的正確に、流暢に使用でき、政治・経済・社会・文化などの一般的なテーマにおいて身近でないテーマに対しても不便なく使用できる。 ネイティブ程度までではないが、自己表現を問題なく話すことができる。

TOPIK のレベルと CEFR の対応関係に関して、国立国際教育院からの公式見解は発表されていないが YUN, Hee-Won (2016) では次の表のように述べている。

Korean Language		CEFR	
TOPIK II	6th grade	C2	Proficient User
	5th grade	C1	
	4th grade	B2	Independent User
	3rd grade	B1	
TOPIK I	2nd grade	A2	Basic User
	1st grade	A1	

上記以外にも韓国語能力評価試験（Korean Language Ability Test:KLAT）2011年韓国の文化体育観光部が認定した財団法人韓国語能力評価院韓国語研究所が実施している。日本では2013年に初めて試験が実施された。まだ受験者が少なく知名度も上記の2つに比べると低いが、唯一 CEFR に準拠していると明言している。CEFR に準拠した KLAT の評価基準は次のとおりである。

【表4】KLATとCEFRの対応⁴

KLATのレベルと級		CEFRのレベル		CEFRの評価目安	学習時間(時)	
初級	1級	A	A1	入門	Breakthrough	150～200時間
	2級		A2	初級	Waystage	400未満
中級	3級	B	B1	中級	Threshold	400以上
	4級		B2	中上級	Vantage	800未満
上級	5級	C	C1	上級	Effective Operational Proficiency	800以上
	6級		C2	最上級	Mastery	

以上のような基準のうち大学における第二外国語教育の基準として参照できるのは「ハングル」能力検定試験であれば5級と4級、(2)韓国語能力試験であれば初級ということになる大学が大多数を占めると考えられる。CEFRのレベルではA1～A2程度とすることができるが、それも4技能のレベルが均等にそろっているかとは言い難い。

カリキュラム作成上の問題点

ここではカリキュラム作成上、問題となりうる点を東海大学のカリキュラムを例に論じていく。東海大学では一部の学部で韓国語の授業が開講されているが、基本的には語学教育センターが全学生対象に授業を開講している。履修に条件はなくどの科目でも自由に履修が可能である。21年度に開講されている科目は以下の通りである。

韓国語入門 1,2	各2単位、週2回	韓国語会話入門 1,2	各1単位
韓国語初級 1,2	各2単位、週2回	韓国語会話初級 1,2	各1単位
韓国語中級 1,2	各2単位	韓国語会話中級 1,2	各1単位
韓国語上級 1,2	各2単位	韓国語表現法 1,2	各1単位
韓国語講読初級 1,2	各2単位	韓国語検定初級 1,2	各1単位
韓国語講読中級 1,2	各2単位	韓国語検定中級 1,2	各1単位
韓国の言語と文化	2単位、講義科目		

専攻課程ではない大学での設置科目数としてはかなり多いのが特徴である。科目も会話・講読・表現法等⁵の技能別に分かれているものもある。多くの大学では設置科目数がこれほど多いことはなく、ハングルの読み書きができ、ある程度の文法を身に付ける段階で終わってしまうことも少なくない。前でも述べたようにハングルの読み書きができるようになるだけでも相当の時間を要する。それに加え発音の変化もありハングルで書かれている通りに発音しないことも少なくない。そのためまずはいかにハングルに慣れさせるかが非常に重要となる。読み書きがある程度自由に行えるようになれば、韓国語は助詞がある点や語順等、日本語と類似している点が多々あり、日本語の知識がある者にとっては非常に学びやすくなるからである。

韓国語教育における最も大きな問題とも言えるのは文法の記述方法である。その中でも品詞の設定や活用の記述方法は一定しておらず教材ごとに異なる⁶。科目ごとに記述方法が異なれば、学習者に不要な混乱を招き理解を阻害する原因となるため、東海大学では全くの初習者を対象とした「入門1・2」とその次段階の科目である「初級1・2」では同一教材を使用しその問題を回避している。活用に対しての理解がある程度

4 韓国語能力評価院 http://www.kets.or.kr/testinfo/jpn_testinfo.asp?pddiv=2

5 「表現法」はwritingの授業である。「上級」では4技能の全てを統合的に学ぶことができるようにしている。

6 中島仁(2021:153-156)の品詞、活用の記述法等参照。

進めば、どの方法で説明されても理解に困ることはないため、それ以外の科目での教材の選定は担当教員に任せている。

それ以外には履修の順序や偏りも無視できない問題である。上記科目は履修の条件はなく初級を未履修でも中級の履修が可能となっている。それぞれの初級から中級へと履修し、最終的に上級科目に到達してもらうのが理想であるが、現状はかならずしもうまくいっていない。また、上の科目になるほど履修者間のレベルが開いてしまうという問題も多く、多くの教員が抱えている問題だと思われるが、今のところ解決策がない状況である。

おわりに

大学での韓国語教育が始まってからそれなりの時間が経過しているが、まだまだその基盤が整ったとはいえない状況にある。ある程度のレベルに達した学生でも4技能の全てが同レベルに達している学生はほぼいないと言ってよい。4技能をまんべんなく育成できる基盤を育てていくことが望まれる。それに加え、韓国語教育では今まで意識的にはほぼ行われてこなかったと言える複言語主義に基づいた教育によって多角的な視野、異文化に対する理解を身につけることも今後重要となってくるだろう。幸い韓国は日本から距離的にも近く文化的な接触も多い。日本に滞在している韓国人も多く、大学にいる留学生の中でも韓国人の占める割合はかなり多い。その一環として東海大学でも「会話中級」で韓国人留学生と日本の学生に協働学習を行う試みを10年以上前から行っている。今後もこのような取り組みを続けつつ他にもできることを模索していきたい。

参考文献

- 大村益夫（1984）「大学における朝鮮語教育の現状」、『季刊三千里』38号、東京：三千里社
- 国際文化フォーラム（2005）『日本の学校における韓国朝鮮語教育：大学等と高等学校の現状と課題』、財団法人 国際文化フォーラム
- 中島仁（2021）『NHK出版これならわかる韓国語文法 入門から上級まで』NHK出版
- 野間秀樹・中島仁（2007）「日本における韓国語教育の歴史」『韓国語教育論講座』第1巻、pp.69-93、東京：くろしお出版。
- 朴珍希（2016）「日本における韓国語教育に関する研究-大学の韓国語学習者調査にみる現状と課題-」、『岡山県立大学教育研究紀要』第1巻1号、岡山大学
- 조선어교육학회 한국어교육현황조사 분과회（2020）“일본 교육기관 한국어 교육 현황 조사 중간 보고서”，조선어교육학회
- YUN, Hee-Won. 2016 Common European Framework of Reference for Language (CEFR) and Test of Proficiency in Korean (TOPIK) International Journal of Area Studies 11:1, A Journal of Vytautas Magnus University